

西日本に残される朝鮮通信使自筆資料

大庭 卓也

要旨 従来の朝鮮通信使研究における、文学史的意義、さらには文化史的意義のとらえ方に関する疑義を具体的事例を示しつつ述べ、重層的な資料調査にもとづいた研究の重要性を説く。本稿では、そのひとつの材料として、福岡藩儒竹田春庵（寛文元―延享2）旧蔵にかかる、正徳度の通信使自筆資料（福岡県立図書館寄託、九州大学附属図書館所蔵）「竹田文庫」二十四点を紹介する。また、萩藩儒小倉尚斎（延宝5―元文2）旧蔵にかかる、同時期の通信使自筆資料（山口県立山口博物館寄託）の存在をもあわせて報告し、もって、西日本における、正徳度通信使と邦人との文学的交流の全容を解明する端緒としたい。

筆者は、先に「朝鮮通信使とその文学史的意義」(「江戸文学」第三二号 ペリかん社 平17・6)において、江戸時代を通じて十二回も行われた朝鮮通信使の来朝を、文学史上の問題としていかに捉えるべきかについて改めて論じた。というのも、従来、文学研究者が通信使を論じ、あるいは言及する場合、それが近世文学史のどの部分とどのよ

うに連動してゆくのか、その点が明らかに示されていないように見受けられるからである。

詳しくは拙稿を参照されたいが、それは、資料の搜索を充分に行わないまま、性急に文学史上の問題として位置付けようとしている点に、大きな原因があるように見受けられる。更に、通信使来朝という問題が、文学のみならず思想、政治、美術といった、わが国の文化全般に関わる論点であるため、それを巨視的に―語弊を恐れずに言えば、いわゆる「文化史」的に―捉えようと急ぐあまり、結果、論点がぼやけ、明らかにしなければならない文学史上の意義が、かえって曖昧になっていのではないかと思われるのである。無論、文化全般との関連を無視しては、文学史的意義の見定めなど不可能である。しかし、隣接領域の成果をバランスよく踏まえながら、一つの事象を多面的に分析してはじめて明らかとなる「文化史」的意義が、どれほど実質的に追求されているのかと考えたとき、反省すべき点は多く見出されるのではあるまいか。

ここでは、美術研究にも関わる例証をひとつ挙げてみたい。例えば、小林忠監修「肉筆浮世絵大観」(講談社 平成8)第九巻に、「蚊帳美人図」(奈良県立美術館蔵、紙本着色、掛幅装)と題する美人図が収録されている。画者は、浮世絵の始祖と仰がれる、かの菱川師宣の流れを汲む古山師政。生没年は未詳で、「浮世絵類考」では宝永から享保頃の人とされる。遊女と思われる女性は、蚊帳から半身を出し、布団の上で遠くを見遣つて物思いにふける様子である。右上部には、それを客からの便りがなくことを独り寝に嘆く姿と見て、七言二句の賛「独臥彩床愁満色／遊人消息負黄昏」(独り彩床に臥し 愁ひ色に満つ／遊人の消息 黄昏を負ふ)が置かれている。賛者は、その署名「朝鮮国長澁」より、明和元年、十代將軍家治襲職を祝賀するために来朝した通信使一行中、上通事の官にあつた吳大齡オデリョンと知られる。この度の通信使一行の姓名を記した、東海波臣著「朝鮮通信使一行座目」(宝曆十四年刊一冊)に、「上通事漢学上通事前司訳院僉正 吳大齡 字大年 号長澁 海州人 辛巳生六十三齡」とあり、最近では、手近な歴史学方面の成果である李元植著「朝鮮通信使の研究」(思文閣出版 平9)にも引用されている。

稚拙な描法にかえって好感がもたれる町絵師の美人に、一国を代表して来朝した通信使の賛という組み合わせのギャップが醸し出す面白さ、これが、賛の依頼者、すなわちかつての所蔵者が意図し、誇つたところでもあつたらう。すなわち、本作は、師政と同時期に活躍した羽川藤永筆「朝鮮通信使来朝図」をはじめとする、通信使との交歓が生み出した浮世絵のひとつとして数えられるべきであると同時に、通信使の墨跡をこよなく愛した当時の風潮を示すものとして理解しなければならぬ。師政の美人が通信使長澁の賛を得て、一幅の絵が完成する。あたかもそれは、邦人

の贈詩が通信使の次韻を得て、ひとつの唱和が完成するのに似ている。畢竟、書画レヴェルでの唱和と言うべきであらう。

古山師政筆「蚊帳美人図」 ※「肉筆浮世絵大観」より転載



しかるに、本作の解説（内田欽三氏執筆）では、「朝鮮の人の賛」があるとして詩句を紹介するものの、以上のよきな文化史的背景には言及されていない。賛の読解に一、二の誤読（「彩床」を「歛床」、「愁満色」を「怨満色」と

する)があるのは、意味の通りを悪くするが、この際、それらは些事に属する。しかし、師政の絵と長泚の賛の唱和というこの絵の眼目、通信使との交歓を示す好資料であるという意義が説明されていないのは、いかがであろうか。また、本作の製作年代を、主に師政の画風変遷という点から、寛保→延享頃と類推しておられるが、明和元年来朝の通信使による賛があるという一事は、たとえ着賛が後になされた可能性があるにもせよ、その際、全く無視してよいものかどうか、筆者にはやはり疑問に思われるのである。

さように、多面的な分析が行われること、「文化史的」意義が追求されることは意外に難しい。近時、「日本文化」「アジア文化」「国際文化」といった語が、文系学問のキーワードとして世に氾濫しているのを見るにつけても、そうした思いを禁じ得ない。各領域が、共有すべき資料とその分析結果を着実に提示してゆく、この蓄積がより一層重い意味を持つてきているように考えるのである。

三

本稿では、以上のような考えのもとに、文学研究の立場から、文学ひいては文化における通信使の史的意義を明らかにする材料となることを期待して、福岡藩儒竹田春庵(貝原益軒門、寛文元→延享2)の旧蔵にかかる、正徳元年に来朝した朝鮮通信使の自筆資料(福岡県立図書館寄託「竹田文庫」、および九州大学附属図書館所蔵「竹田文庫」)を網羅的に紹介する。応酬相手は、製述官の李碩(号東郭)、書記の嚴漢重(号龍湖)・南聖重(号泛叟)・洪舜衍(号鏡湖)が多数を占める。特に東郭は、新井白石著「白石詩草」(正徳二年刊一冊)をはじめ、邦人詩文集に序跋を寄せるなど、わが国の文壇に残した足跡は大きい。自筆資料のいずれもが、韓船の停泊地であった相島(現福

岡県糟屋郡新宮町)において、春庵が通信使と実見した正徳元年八月十九日、二十一日に贈られたものであり、のちに自身の筆談文、贈詩と合わせて「藍島倭韓筆語唱和」(正徳二年成写本一冊)に応酬の全容をまとめている。このあたりの経緯、前述拙稿で報告し、拙稿「福岡藩儒竹田春庵と朝鮮通信使」(『語文研究』第九三号 平14・6)でも詳述したところである。

更に、筆者の意をたくましくしたのは、山口藩藩校明倫館初代学頭を勤めた小倉尚斎(山田復軒・伊藤坦庵・林鳳岡門、延宝5—元文2)もまた、正徳度の通信使応接を萩において勤めた人物であるが、その際、通信使より贈られた自筆資料卷子三巻が小倉家(山口市後河原)に残されており、現在山口県立山口博物館に寄託されている由、尾崎千佳、木越俊介両氏より教えられたことである。両氏の御好意で、その複写を見たところ、応酬相手は李東郭、嚴龍湖、南泛叟、洪鏡湖の四人、内容は各人の名刺、筆談、贈詩にいたる自筆物のすべてを含み、また応酬の全容の控えを別に作っている点などは、ことごとく春庵の場合と同じである。

正徳度の使行は、幕初以来の通信使歓迎熱が頂点に達したこともあり、文壇へ与えた影響は極めて大きい。その意味において、西日本の主要な通信使の停泊地である福岡、山口両地における筆談唱和の資料が揃ったことは、正徳度通信使のより立体的な文学、文化的意義の解明につながるであろう。かく資料面において進展があったことを心から喜びたい。小倉尚斎旧蔵資料に関しても、他日、両氏とともに紹介の機会を得られればと考えている。

なお、以下、春庵旧蔵にかかる通信使自筆資料の紹介にあたっては、前述「藍島倭韓筆語」における応酬順に配列し、末尾に一括して簡潔な資料情報(所蔵者、請求番号、寸法、詠作・執筆年時)と釈文を示した。また釈文においては、通行の字体を用いて句読点・読み仮名を私に付し、訓読は、原則として「藍島倭韓筆語」の施訓に従った。

1 李東郭名刺

僕姓李名贖字重叔號
東郭已升進士及第
壯危西子重誠學若海凌
方守以直臣快制述三官未
到云 年子甲午生庚

2 洪鏡湖名刺

僕姓洪名舜衍字命九
號鏡湖丁巳進士乙酉文
科方為太常寺判官覓
差今番正使記室耳
年歲癸巳生

3 嚴龍湖名刺

僕姓嚴名漢重字子淵越人也稱
龍湖年今四十八本進士及第
歷職秘書監高啟郡太守今
為通信副使書記官

4 南泛叟名刺

儒姓南名聖重字仲容號
 泛叟命宜寧人也今以白衣
 奉祀書之未年甲午

5 李東郭筆談文

僕家様已三箇月遠涉凡海
 行各泊 貴折三 洪元體
 半亦且保重依中 貴幸為
 勝為 性必為 科名官職
 為之書告茲前、再

東郭相

6 洪鏡湖七言絕句詩箋

春和
 春蕊詞白

西國文華運層昌
 宏星今日映扶桑
 浮生宇宙新如景
 不覺燈前秋夜長

鏡湖稿

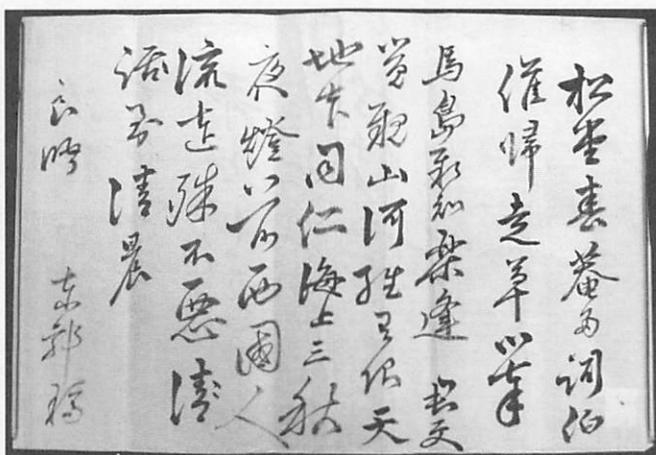
7 嚴龍湖七言絕句詩箋

表蒼詞泐免辱
担願又脈佳什甚盛意
也教次以呈
喜觀 隣邦業更昌男
况且逐志蓬素仙區交
處窮遊矚肯憚波程萬
里長
沈明祥行

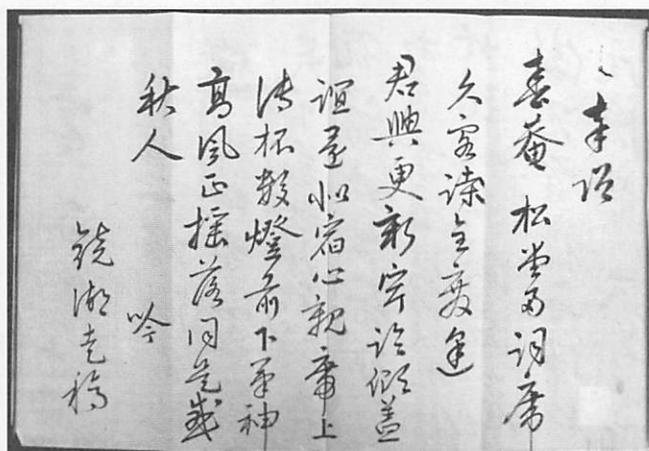
8 南泛叟七言絕句詩箋

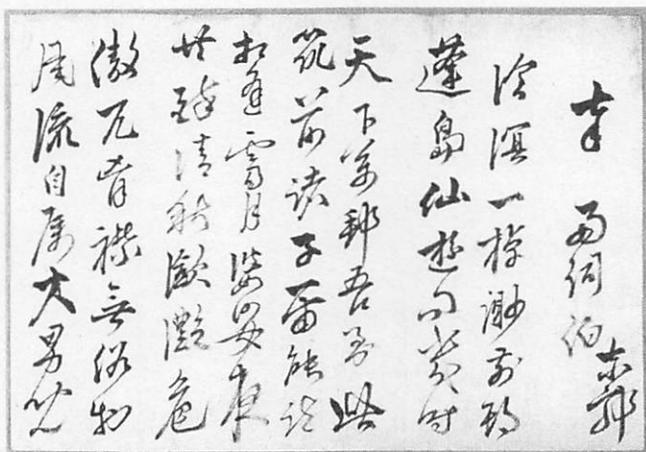
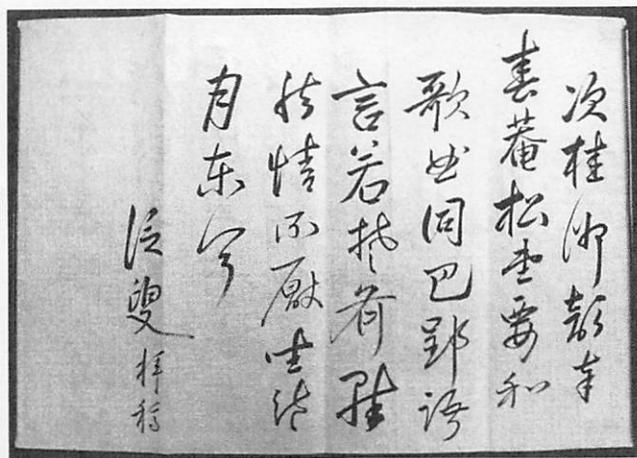
更次
表蒼歌
先子乘槎際古
昌以今人半爰冷
柔一岫藍氣輕
迥地爽桴造泥
沈明祥行
陸子文

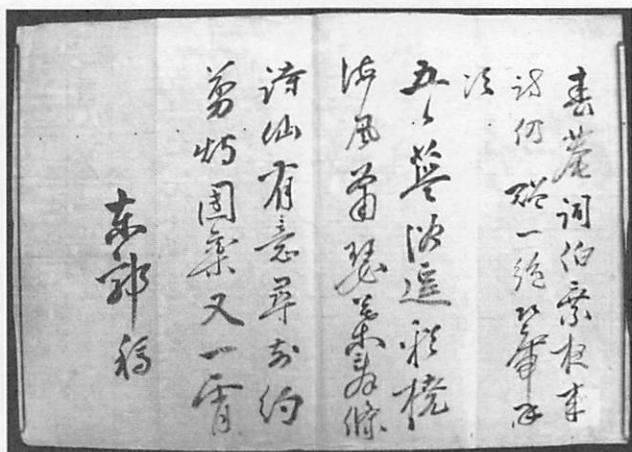
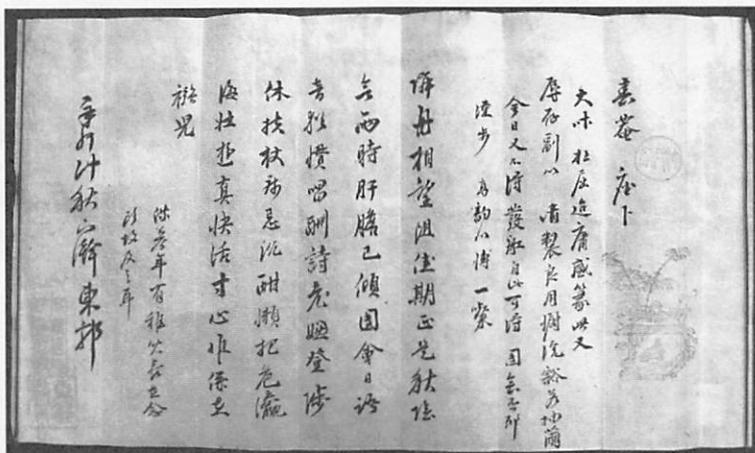
9 李東郭五言律詩箋



10 洪鏡湖五言律詩箋





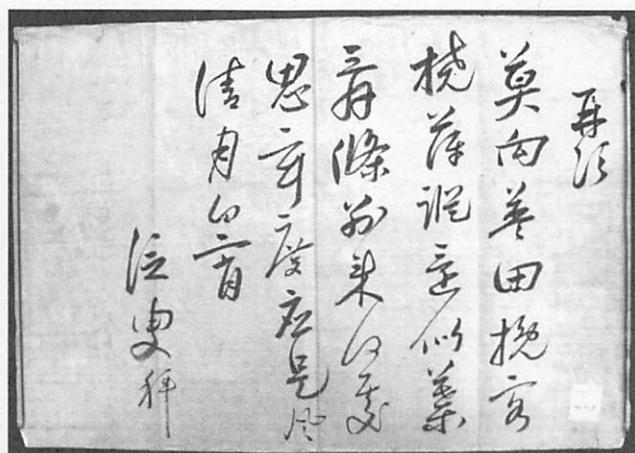
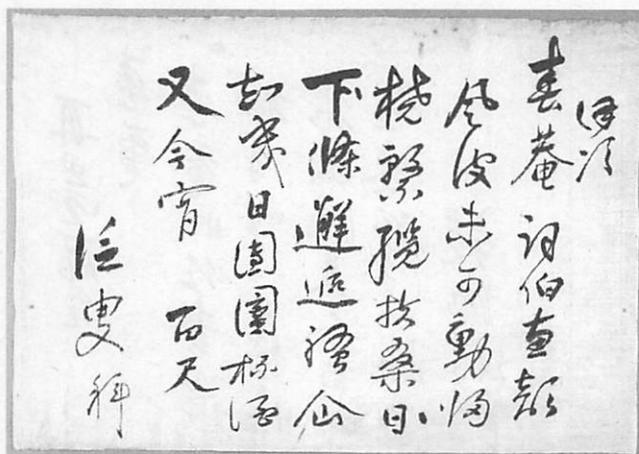


又幸
 春菴
 海門秋西窗停橈
 亂竹風敲碧玉椽
 多洲表泐西河泊
 一標法去信名傳

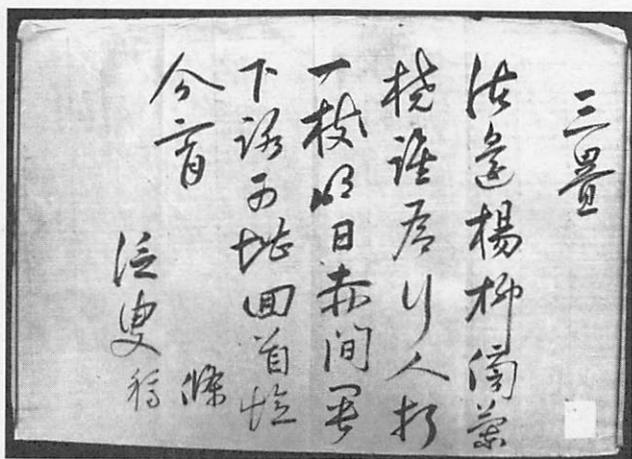
東郭

春菴
 綠玉仙柯長炎標
 錦笈初浦秋輕橈
 雲向清房隨子晉
 風蕭閑是月四宵

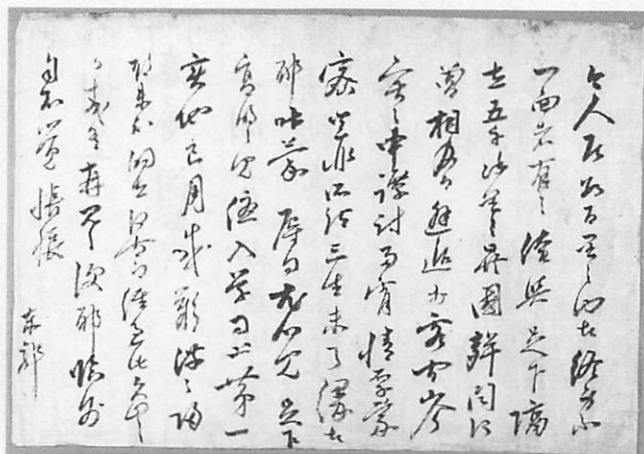
東郭
 用前
 韻三疊

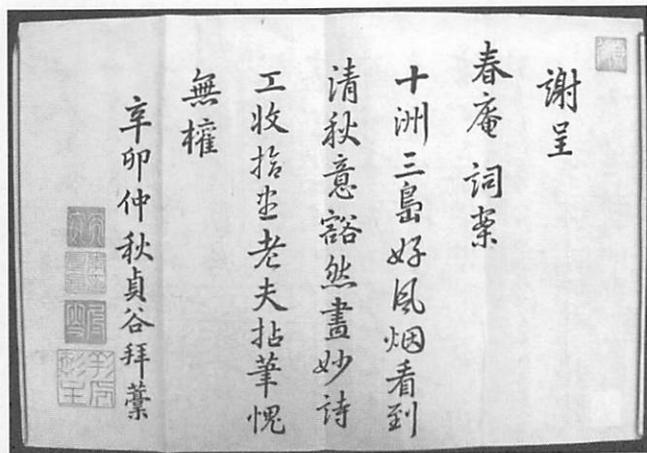
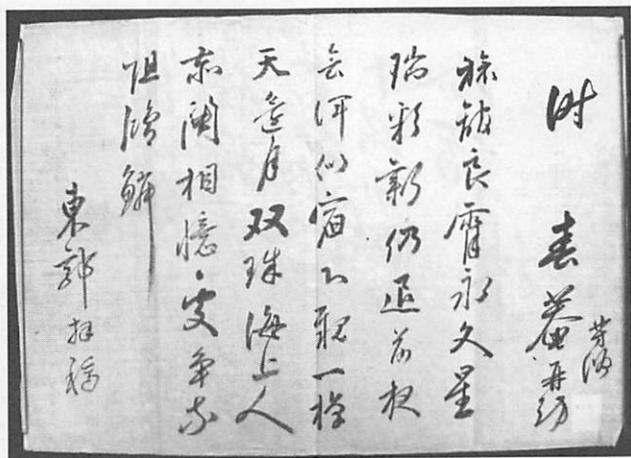


21 南泛叟七言絶句詩箋



22 李東郭筆談答文





1 —— 李東郭名刺

一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—169 273×153

正徳元年八月一九日執筆

僕姓洪、名舜衍、字命九、号鏡湖。丁巳進士、乙酉文科、方為太常寺判官。見差今番正使記室耳。年歲癸巳生。

〔僕 姓は洪、名は舜衍、字は命九、号は鏡湖なり。丁巳の進士、乙酉の文科、方に太常寺の判官と為る。見ゆるに今番正使の記室に差するのみ。年歳は癸巳に生まる。〕

僕姓李、名礪、字重叔、号東郭。乙卯進士、癸酉及第狀

元、丙子重試。曾為安陵太守。以通信使製述官來到矣。

年則甲午生矣。

3 —— 嚴龍湖名刺

一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—165 274×174

正徳元年八月一九日執筆

〔僕 姓は李、名は礪、字は重叔、号は東郭なり。乙卯の進士、癸酉に狀元に及第し、丙子の重試なり。曾て安陵太守と為る。通信使の製述官を以て來り到的。年は則ち甲午に生まる。〕

2 —— 洪鏡湖名刺

一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—166 296×213

正徳元年八月一九日執筆

僕姓嚴、名漢重、字子鼎。寧越人也。号龍湖。年今四十八。忝進士及第、歷職秘書監、高敞郡太守。今為通信副使書記官。

〔僕 姓は嚴、名は漢重、字は子鼎。寧越の人なり。号は龍湖。年は今四十八。進士の及第を忝なくす。職を歷ること、秘書監、高敞郡の太守。今通信副使の書記官と為る。〕

4 — 南泛叟名刺

一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—167 29.6×20.0

正徳元年八月一九日執筆

僕乗槎已四箇月、遠涉風濤、幸得到泊於貴州。三使道體中、亦且保重俺等之慶幸曷可勝喻。僕之姓名、別号、科名、官職、別已書告。茲闕之耳。

〔僕槎に乗ること已に四箇月、遠く風濤を涉り、幸ひに貴州に泊ることを得たり。三使の道體中、亦且つ保重す。俺等の慶幸、曷ぞ勝て喻ふべけんや。僕の姓名、別号、科名、官職、別に已に書し告ぐ。茲に之を闕くのみ。〕

僕姓南、名聖重、字仲容、号泛叟。宜寧人也。今以白衣、忝記室而來。年四十七。

〔僕姓は南、名は聖重、字は仲容、号は泛叟。宜寧の人なり。今白衣を以て記室を忝くして来る。年は四十七なり。〕

*「宜寧人」上の「今」字、見せ消ちす。

6 — 洪鏡湖七言絶句詩箋

一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—163 29.5×49.5

正徳元年八月一九日詠

5 — 李東郭筆談答文

一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—168 29.7×19.0

正徳元年八月一九日執筆

奉和春菴詞伯 春菴時伯に和し奉る

両国文華運属昌 両国の文華の運昌なるに属す

客星今日映扶桑 客星 今日 扶桑に映す

浮世宇宙新知楽 浮世 宇宙 新知の楽たのしみ
不覚灯前秋夜長 覚えず 灯前 秋夜の長きことを

8 — 南泛叟七言絶句詩箋 一紙
福岡県立図書館寄託「竹田文庫」
竹田文庫—161 31.0×41.6
正徳元年八月一九日詠

7 — 敬龍湖七言絶句詩箋 一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」
竹田文庫—162 29.6×38.9
正徳元年八月一九日詠

更次春菴韻 更に春菴の韻を次ぐ
先子乗棧際世昌 先子 棧いかにに乗りて世の昌まさなるに際はる
即今人事變蒼桑 即今 人事 蒼桑あざさに變ず

春菴詞伯既辱枉顧、春菴詞伯 既に枉顧を 辱かたじけなくし、
又眎佳什。甚盛意 又佳什を眎しす。甚だ盛意なり。
也。敬次以呈。 敬うやまひて次ついできて以もつて呈ます。

殊方処処經過地 殊方 処処 經過あつの地
幾撫遺蹤涕淚長 幾いくばくか遺蹤を撫なでて涕淚なみだ長し
*第三句、「一岐藍島」を見せ消ちして「殊方処処」に改む。

喜觀隣邦業更昌 喜よろこび觀みる 隣邦の業 更に昌まさなることを
男兒且遂志蓬桑 男兒 且かつつ蓬桑ほうそうに志こころすことを遠とほく
仙区処処窮遐矚 仙区 処処 遐矚あまほを窮あむ
肯憚波程万里長 肯あへて憚おそらんや 波程 万里の長きことを

9 — 李東郭五言律詩箋 一紙
福岡県立図書館寄託「竹田文庫」
竹田文庫—153 31.0×45.4
正徳元年八月一九日詠

正徳元年八月一九日詠

松堂、春菴両詞伯催 松堂、春菴両詞伯帰ることを

帰。走筆以奉。 催す。筆を走らせて以つて奉る。

馬島新知楽 馬島 新知の楽たのしみ

逢君更覚親 君に逢ひて更に親しきことを覚ゆ

山河雖有限 山河 限り有りと雖も

天地本同仁 天地は本もと 同仁

海上三秋夜 海上 三秋の夜

灯前両国人 灯前 両国の入

流連殊不悪 流連 殊に悪しからず

良晤到清晨 良晤 清晨あけぼのに到らん

*第八句、「清話」を見せ消ちして「良晤」に改む。

奉贈春菴、松堂両詞 春菴、松堂両詞席に贈り奉る。

席

久客吟全廢 久客 吟を全まづて廢す

逢君興更新 君に逢ひて 興きよう更に新たり

寧論傾蓋誼 寧なづんぞ論ぜん 傾蓋の誼

還似宿心親 還かへりて宿心の親しきに似たり

席上伝杯数 席上 杯を伝ふること数しばしばにして

灯前下筆神 灯前 筆を下すこと神なり

高風正揺落 高風 正に揺落し

同是感秋人 同じく是れ 秋を感じる人

*第一句、「詩」字を見せ消ちして「吟」字に改む。

10 — 洪鏡湖五言律詩箋

一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—164 310×455

正徳元年八月一九日詠

11 — 南泛叟五言絶句詩箋

一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—158 310×455

正徳元年八月一九日詠

次桂州韻、奉春菴、桂州の韻を次ぎ、春菴、松堂に

松堂、要和。奉り、和することを要む。

歌曲同巴鄂 歌曲 巴鄂に同じく

語言若楚齊 語言 楚齊のごとし

默默情不厭 默默として情 厭はず

坐待月東吟 坐して月の東するを待つ

12 — 李東郭七言律詩箋 一紙

九州大学附属図書館蔵「竹田文庫」

竹田文庫—112 310×452

正徳元年八月一九日詠

奉阿詞伯 阿詞伯に奉る

滄溟一棹渺前期 滄溟 一棹 前期に渺たり

蓬島仙遊問幾時 蓬島の仙遊 幾ばくの時とか問ふ

天下万邦吾到此 天下の万邦 吾 此に到る

筑前諸子爾能詩 筑前の諸子 爾 詩を能くす

相逢霽月婆娑夜 相逢ふ 霽月 婆娑の夜

共醉清秋激澗巖 共に酔ふ 清秋 激澗の巖

傲兀胸襟無俗物 傲兀たる胸襟 俗物無し

風流自厲大男兒 風流 自から厲す大男兒

13 — 李東郭七言絶句詩箋 一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—156 290×503

正徳元年八月二日詠

春菴座下

大昨枉屈。迨庸感篆。大昨枉屈す。庸に迨りて感篆す。

此又辱存、副以清製。此に又辱く存し、副ふるに清

良用慰浼。豁若抽繭。製を以てす。良に用つて慰浼す。

今日又不得発缸。自豁として繭を抽くがごとし。今

此可得団会否耶。謹 日又発缸を得ず。此より団会を

歩高韻、以博一粲。 得べけんや否や。 謹みて高韻を

歩ませて、以つて一粲を博む。

14 —— 李東郭七言絶句詩箋 一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—152 32.5×46.1

隣舟相望阻佳期 隣舟 相望みて佳期を阻つ

正徳元年八月二日詠

正是秋陰欲雨時 正に是れ 秋陰 雨ふらんと欲する時

肝膽已傾団会日 肝膽 已に傾く団会の日

語言猶慣唱酬詩 語言 猶ほ慣らふ唱酬の時

老嫌登陟休扶杖 老いて登陟を嫌ひ 杖に扶らるることを休

め

病忌沈酣懶把厄 病みて沈酣を忘み 厄を把るに懶し

瀛海壯遊真快活 瀛海の壯遊 真に快活たり

寸心惟係在襜兒 寸心 惟だ係はるのみ 襜に在る兒

僕暮年有稚兒。長在 僕暮年、稚兒有り。長く念

念頭。故及之耳。 頭に在り。故に之に及ぶのみ。

*右下に、東屋で竹林を眺める人物図をあしらった色

摺り詩箋を使用。

春菴詞伯乘夜來訪、 春菴詞伯 夜に乗じて來訪し、
仍贈一絶。即席同 仍ち一絶を贈る。即席に同じく

次。 次ぐ。

五日藍洲逗彩橈 五日 藍洲 彩橈を逗む

海風蕭瑟葉辭条 海風 蕭瑟として葉 条を辭す

詩仙有意尋前約 詩仙 意有りて前約を尋ね

剪燭團樂又一宵 燭を剪りて 團樂又一宵

15 —— 李東郭七言絶句詩箋 一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—155 32.5×46.3

正徳元年八月二日詠

歩高韻、以博一粲。 得べけんや否や。 謹みて高韻を

歩ませて、以つて一粲を博む。

14 —— 李東郭七言絶句詩箋 一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—152 325×46.1

正徳元年八月二日詠

隣舟相望阻佳期 隣舟 相望みて佳期を阻つ

正是秋陰欲雨時 正に是れ 秋陰 雨ふらんと欲する時

肝膽已傾团会日 肝膽 已に傾く团会の日

語言猶憤唱酬詩 語言 猶ほ憤らふ唱酬の詩

老嫌登陟扶杖 老いて登陟を嫌ひ 杖に扶らるることを休

め

病忌沈酣懶把卮 病みて沈酣を忌み 卮を把るに懶し

瀛海壯遊真快活 瀛海の壯遊 真に快活たり

寸心惟係在襁兒 寸心 惟だ係はるのみ 襁に在る兒

僕暮年有稚兒。長在 僕暮年、稚兒有り。長く念

念頭。故及之耳。 頭に在り。故に之に及ぶのみ。

*右下に、東屋で竹林を眺める人物図をあしらった色

摺り詩箋を使用。

春菴詞伯乘夜來訪、 春菴詞伯 夜に乗じて來訪し、
仍贈一絶。即席同 仍ち一絶を贈る。即席に同じく
次。 次ぐ。

五日藍洲逗彩櫂 五日 藍洲 彩櫂を逗む

海風蕭瑟葉辭条 海風 蕭瑟として葉 条を辭す

詩仙有意尋前約 詩仙 意有りて前約を尋ね

剪燭團樂又一宵 燭を剪りて 團樂又一宵

15 —— 李東郭七言絶句詩箋 一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—155 325×46.3

正徳元年八月二日詠

又奉春菴

又春菴に奉る

海門秋雨客停棧

海門の秋雨 客 棧を停む

乱竹風敲碧玉条

乱竹 風は敲く 碧玉の条

多謝春洲阿詞伯

多謝す 春洲 阿詞伯

一樽佳会統前宵

一樽 佳会 前宵を統く

三疊

用前韻

前韻を用ゐる三疊

17 — 洪鏡湖七言絶句詩箋

一紙

九州大学附風園書館蔵「竹田文庫」

竹田文庫—114 326×458

正徳元年八月二日詠

16 — 李東郭七言絶句詩箋

一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—157 464×325

正徳元年八月二日詠

再疊録奉春菴 再疊、録して春菴に奉る

春菴將欲動掃棧 春菴 將に掃棧を動かさんと欲す

柳岸嗟無可繫条 柳岸 嗟く 繫ぐべきの条無きことを

聚散從來人易感 聚散 從來 人感じ易し

豈容孤負可憐宵 豈に憐れむべきの宵を孤負するを容れんや

春菴座下

春菴の座下

欲尋銀浦放輕棧

銀浦を尋ねんと欲して輕棧を放つ

縁玉仙柯長幾条

縁玉 仙柯 長きこと幾条

会向清都随子晋

会ふ 清都に向ひて子晋に随ひ

鳳簫閑弄月明宵

鳳簫 閑かに月明の宵を弄するに

18 — 岐龍湖七言絶句詩箋

一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—98 324×458

正徳元年八月二日詠

謝春菴詞伯連夜左顧、春菴詞伯の連夜左顧するを

仍次惠韻

謝し、仍りて惠韻を次ぐ

藍洲秋日逗蘭橈 藍洲 秋日 蘭橈を逗む

海岸風生葉脱条 海岸 風生じて 葉 条を脱す

頼為詞人勤再訪 頼ひに詞人勤めて再び訪ふが為に

不妨清話到深宵 妨げず 清話 深宵に到ることを

*第一句「繫」字を見せ消ちして「逗」字に改む。

19 — 南泛叟七言絶句詩箋 一紙

九州大学附属図書館蔵「竹田文庫」

竹田文庫—113 324×458

正徳元年八月二日詠

同次春菴詞伯惠韻 同じく春菴詞伯の惠韻に次ぐ

風波未可動棉橈 風波 未だ棉橈を動かすべからず

繫纜扶桑百尺条 纜を繫ぐ 扶桑百尺の条

邂逅驪仙知幾日 驪仙に邂逅す 知んぬ幾日ぞ

团欒杯酒又今宵 团欒の杯酒 又今宵

*第二句、「日下」を見せ消ちして「百尺」に改む。

20 — 南泛叟七言絶句詩箋 一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—159 323×463

正徳元年八月二日詠

再次 再び次ぐ

莫向藍田挽客橈 藍田に向かひて 客橈を挽く莫れ

萍蹤還似葉辞条 萍蹤 還りて葉の条を辞するに似たり

別来何処思玄度 別来 何れの処にか玄度を思はん

応是風清月白宵 応に是れ 風清く月白き宵なるべし

21 — 南泛叟七言絶句詩箋 一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—160 32.5×46.4

正徳元年八月二日詠

三疊 三疊

渚辺楊柳傍蘭機 渚辺の楊柳 蘭機に傍ふ

誰為行人折一条 誰か行人の為に一条を折る

明日赤間関下路 明日 赤間関下の路

可堪回首憶今宵 堪ふべけんや 首を回らして今宵を憶ふ

*第二句、「一枝」を見せ消ちして「一条」に改む。

22 — 李東郭筆談答文 一紙

九州大学附属図書館蔵「竹田文庫」

竹田文庫—111 32.3×45.6

正徳元年八月二日執筆

今人居數百里之内者、終身一面者有之。俺与足下隔在五千餘里之異國。声聞何曾相及。而邂逅於客間岑寂之中、譚討兩宵、情厚藪密。豈非所謂三生未了緣者耶。昨蒙辱問、尤覺足下高明之見、優入學問上第一實地。良用感歎。僕之帰期、未知的在何時。而經過此嶋之日、或有再見之便耶。臨別自不覺悵悵。

(今人の數百里の内に居る者の、終身一面せざる者之有り。俺と足下と隔てて五千餘里の異國に在り、声聞何ぞ曾て相及ばん。而れども客間岑寂の中に邂逅して、譚討すること兩宵にして、情厚く密を藪る。豈に所謂三生未了の縁なる者に非ざらんや。昨辱問を蒙り、尤も覺ゆ、足下の高明の見、優に學問上の第一の實地に入ること。良に用つて感歎す。僕の帰期 未だ的らかに何れの時に在るかを知らず。而して此の嶋に經過するの日、或は再見の便有らんか。別れに臨むも自から悵悵たることを覺えず。)

23 —— 李東郭五言律詩箋 一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—154 32.3×46.2

正徳元年八月二日詠

謝春菴芳洲再訪 春菴、芳洲の再訪を謝す

旅館良宵永 旅館の良宵 永く

文星瑞彩新 文星の瑞彩 新たなり

仍追前夜会 仍りて追ふ 前夜の会

渾似宿心親 渾て宿心の親しきに似る

一棹天辺月 一棹 天辺の月

双珠海上人 双珠 海上の人

赤関相憶処 赤関 相憶ふ処

争奈阻鴻鱗 争奈せん 鴻鱗を阻つることを

24 —— 貞谷七言絶句詩箋 一紙

福岡県立図書館寄託「竹田文庫」

竹田文庫—173 29.0×50.3

正徳元年八月二四日詠

謝呈春庵詞案 春庵詞案に謝し呈す

十洲三島好風烟 十洲 三島 風烟好し

看到清秋意豁然 清秋に看到て 意 豁然たり

画妙詩工收拾尽 画妙の詩工 收拾し尽す

老夫拈筆愧無權 老夫 筆を拈りて権無きを愧づ

〔附記〕本稿をなすにあたり、貴重な資料の掲載を許可下さった、竹田準氏、九州大学附属図書館、福岡県立図書館、奈良県立美術館、講談社の各位に深甚の謝意を表します。また写真撮影に関して、九州大学大学院の菱岡憲司氏の協力を得た、記して謝意に代えます。